

【地震・津波】⇒1957年、住民の防災意識の高揚図り、気象台が考案、公表した「いろはかるた」

50年前にも考えられていたソフト対策 「津波対策いろはかるた」で防災教育

読み札と絵札の2種類の札(カード)を使って遊ぶ「かるた」は、日本独自のもので、読み札の文面にはことわざや教訓が含まれており、遊びながら学ぶことができる。「かるた」は、近年、災害の知識や防災対策を学ぶためのカードゲームとして、防災教育に盛んに活用されるようになったが、岩手県の三陸沿岸地域においては、すでに50年前の1957(昭和32)年、盛岡地方気象台と宮古測候所が、津波の防災教育に活用するための「津波対策いろはかるた」を考案。同年12月、その「いろは歌」を公表していたことが、大船渡市在住の津波災害史研究者山下文男氏によって確認された。

現在の盛岡地方気象台には関連する資料はなく、この「いろは歌」は、1959(昭和34)年10月に、山本正己・盛岡地方気象台長(当時)が宮村撰三・東京大学地震研究所助教授(当時)に送った手紙に添えられていた資料から分かったもので、山下さんは宮村さんからこの手紙と資料を研究に役立ててほしいと託されていた。

三陸沿岸は「津波の常襲地」と言われ、1896(明治29)年の明治三陸沖地震津波災害では、最大波高38.2mの大津波が押し寄せて、岩手県内の死者の数は約1万8000人に達した。さらに、1933(昭和8)年に発生した昭和三陸沖地震津波災害では、過去の津波の教訓を生かしきれずに、再び甚大な人的被害が発生。死者・行方不明者の数は2600人を超えた。

「津波対策いろはかるた」が考案された1957年は、昭和三陸沖地震津波災害から24年という年月が過ぎ、地域の人々の間では津波の教訓は風化し、津波の記憶さえも消えつつある頃であったと思われる。そうした中で、当時、地域防災でも重要な役割を担っていた気象台や測候所の人たちは、津波災害で二度と犠牲者を出さないためには、日頃から津波への備えや心構え、避難方法などを住民に分かりやすく伝えていくことが必要だと考え、「津波対策いろはかるた」を考案したのである。これは今で言う

■津波対策いろはかるた

(★印は、見直す必要があるもの)

い	一度逃げたら二時間お待ち(★)	あ	あらゆる火も消せ地震の避難
ろ	老人子供の避難を先に(★)	の	延ばすな津波の防災対策
は	初めて安心警戒解除	お	沖の船舶避難は沖へ
に	逃げ口必ずふだんの用意	く	苦しい経験記念碑に
ほ	防波堤で一村安心(★)	や	薬品、食料非常袋に
へ	下手な思案より先ず退避	ま	毎年つづけよ津波の訓練
と	遠い地震でも油断はするな	け	警報文は「ツナミオシレ」「ヨワイツナミ」「オオツナミ」
ち	地震の後は津波の警戒	ふ	V状湾奥最大の津波
り	流言ひ語に惑わされるな	こ	子供の時から津波の教育
ぬ	盗人よりも暴れる津波	え	映画も津波の啓蒙宣伝
る	留守と津波に心の鍵を	て	天災は今すぐにでもやってくる
を	終わりにしよう津波の災害	あ	上げ潮にまさる引き潮の威力
わ	忘れるな津波の大きな被害	さ	三陸海岸津波の本場(★)
か	各戸に備えよ懐中電灯	き	近所の人を誘って避難(★)
よ	よみましょう、ためらい、あわて、よくばり	ゆ	ゆらゆら地震津波の警戒
た	高い所に津波なし	め	滅多に起こらぬ津波を忘れず
れ	例年手入れよ防潮林	み	見張り人たて海の警戒
そ	そろって避難終わって点呼(★)	し	震災よりも火災を防げ
つ	常に備えよ非常袋	ゑ	演習通りに津波の退避
ね	眠る夜半にも津波は来る	ひ	避難道路は低地を避けよ
な	なんにもならない迷信すてよ	も	もすこしと思う心が怪我のもと
ら	ラジオで知らせる津波警報	せ	正式の発表以外は借せすいわず
む	無理して怪我すな大事な体	す	す早く避難定めたとこへ
う	海を背に近道逃げよあわてずに	ん	運より準備

ソフト対策だが、「いろは歌」の文面のみが資料に記されていたことから、読み札や絵札などは複製されず、カードゲームとしては完成しなかったとみられる。

「津波対策いろはかるた」の「いろは歌」は、「くへ」下手な思案より先ず退避、「くう」海を背に近道逃げよあわてずに、「くこ」子供の時から津波の教育などで、山下さんは「分かりやすく、現在でも通用する教訓がほとんど」と言う。そして、研究が進んだ今、「一部表現を変える必要があるものについては今後見直し、皆さんからの意見や提案を基に、かるたを完成させたい」としている。

見直す必要があるのは「くい」一度逃げたら二時間お待ち(見直す内容→警報解除まで待つ必要がある)、「くろ」老人子供の避難を先に(→逃げられる人から逃げる)、「くほ」防波堤で一村安心(→過信は禁物)、「くそ」そろって避難終わって点呼(→ばらばらでい

いからすぐ逃げる)、「くさ」三陸海岸津波の本場(→三陸に限らず、津波はどこにでも来る)、「くき」近所の人を誘って避難(→逃げられる人から逃げる)の6カ所である。

山下さんは、「考案した人たちのためにも、この「かるた」の発行を是非実現させたい。そして、自主防災組織などで実際に役立ててもらい、50年前に地域住民の防災意識を高めようと努力していた人たちの思いを伝えていければと思う」と話し、9月16日に岩手県大船渡市で開かれた「歴史地震研究会」では、その活用法について意見を募るとともに、発行実現への協力を呼び掛けた。

問い合わせ先

津波災害史研究者/山下文男

TEL —

FAX 0192-42-2013

E-mail —

URL —